

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

劉 勝男

論 文 題 目

中国におけるデューイ教育思想の受容とその変遷

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 早川 操

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 松下 晴彦

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 服部 美奈

論文審査の結果の要旨

本論文は、アメリカの教育学者ジョン・デューイの教育思想が 20 世紀の中国教育に与えた影響について考察するため、彼が中国を訪問した 1920 年前後の頃から現在に至るまでの約一世紀にわたる彼の教育思想の受容とその変遷について分析することを通じて、中国におけるアメリカ的な民主主義的経験主義的な教育思想が果たした役割とその意義について検討することを目的とする。

20 世紀初期の中国においては、デューイの教育思想が社会の民主化や教育の近代化のために影響を与えたことが知られている。本論文では、中国におけるデューイ教育思想の受容を研究対象とすることによって、デューイ研究の三つの高揚期が見られたことを解明しようとするものである。20 世紀初期の頃には「デューイ学派」と呼ばれる学者や教育者を生み出し、20 世紀中期における共産主義体制の出現とともにデューイの教育思想は批判にさらされ、文化大革命終了後の改革開放期には再び評価されるようになったデューイ研究の変遷についての分析が本論文の中心となる。

第一回目の高揚期は 20 世紀初期から中頃までの期間であり、デューイの二年にわたる中国滞在期から 30 年近くにわたって影響が及んだ時期である。この時期には、デューイの著書が中国語に翻訳され、胡適や陶行知などのデューイ学派の学者や実践家が出現した。第二回目の高揚期は、中華人民共和国成立後の 1950 年代であり、共産主義下にあった中国の教育界では、資本主義社会の代表的教育理論や実践として激しいデューイ批判が展開された。第三回目の高揚期は、1980 年代以降の改革開放期の時期であり、試験中心の教育から子どもの個性や人間性を重視する教育への転換を求める教育改革の流れの中でデューイ教育理論が再評価される時期である。本論文では、これら三つの高揚期における中国の代表的教育学者や研究者によるデューイ教育思想研究の特徴について検討し、中国教育界がデューイに代表される西洋教育思想をどのように受け入れ批判したのかについて考察している。

本論文の内容は、序章と終章を含め、七章から構成されている。

序章では、本稿の研究目的、中国におけるデューイ教育思想の影響についての先行研究の分析、本論文の研究手法と構成などについて検討した。研究方法としては文献資料の分析が中心となるが、1920 年代や 50 年代の文献資料が散逸しているため、資料収集とその解読に留意した。

第一章では、アメリカにおけるデューイ教育思想の意義について考察し、デューイのプラグマティズム教育思想が発生してきた社会的背景やその学問的系譜と、彼の教育理論や実践が世界の国々にどのような影響を与えたのかについて検討した。

第二章では、デューイが中国を訪問した後の 1920 年代の中国におけるデューイ教育思想の受容とその変遷について考察した。第一節では、デューイが、日本を経由して、中国を訪問するに至った経緯を説明した。第二節では、中国においてデューイ教育思想が受け入れられるにあたって蔡元培らの教育指導者が果たした役割、二年以上にわたるデューイの中国滞在と中国各地における講演をつうじての啓発活動、その後のアメリカからの教育学専門家が果たした啓蒙活動の役割について検討し、デューイ教育思想が 1920 年代の中国教育界で受容され普及した原因を考察した。第三節では、「デューイ熱」が冷めた後の中国におけるデューイ哲学とマルクス主義哲学との論争について検討した。

第三章では、20 世紀前半（1912-1949）におけるデューイ教育思想の受容について、特に、中国共産主義から見たデューイ教育思想の位置づけと、胡適や陶行知などデューイ学派によるデューイの経験主義的教育思想の受容の特徴を中心に考察した。第一節では、デューイの学校と社会、生活と教

論文審査の結果の要旨

育との関係性についての中国人学者の見解を検討した。第二節では、毛沢東と陳独秀に与えたデューイ経験主義哲学の影響について考察した。第三節では、デューイ学派の中国人研究者として、胡適、陶行知、郭秉文、蔣夢麟の4人を取り上げ、デューイ教育思想が彼らの教育観の形成に与えた影響について分析した。第四節では、デューイ学派の代表的思想家とみなされる胡適と陶行知を取り上げ、方法論を重視する胡と教育実践に取り組んだ陶のデューイ受容のあり方の違いを比較考察した。30年以上におよぶ20世紀前半のこの時期は、中国人学者が主にデューイと彼の教育思想や実践について積極的に評価し摂取した時期であった。その受容の仕方は、デューイ哲学や教育思想を、中国が直面していた歴史的課題である救国の手段として受容しようとするものであり、デューイの民主主義思想と民主的科学的教育思想の受容がその中心となったことを指摘した。

第四章では、1950年代の中国人学者によるデューイ教育思想の受容の形態が、積極的な評価から激しい批判へと変貌した過程について検討した。第一節では、生長、進歩、不確定性、知恵と知性、経験などのデューイの教育思想の基本的な概念について批判を行った曹孚の見解を考察した。第二節では、マルクス主義の観点からデューイの経験主義的教育思想を主観的経験論や唯心論であると批判した陳友松や陳鶴琴らの見解を分析し、さらに経験主義的な教授法とカリキュラムについての批判を検討した。第三節では、デューイ教育理論の行き過ぎた批判を反省した曹孚と陳友松がさらに批判にさらされることになった過程を分析した。第四節では、1950年代の中国におけるデューイ教育思想批判をマルクス主義とプラグマティズムの対立の構造の中に置くことにより、政治的な観点からの批判がもたらす課題について指摘した。この時期における中国人学者たちは、最初の頃はデューイ教育思想の内容について学問的論理的な整合性の観点から批判を展開したが、その後展開されたのは、論理的整合性や一貫性の観点よりも政治的意向を念頭に置きながらのデューイ思想批判であったことを、当時の文献を丹念に検討することにより実証的に分析した。

第五章では、1977年以降におけるデューイ教育思想と改革開放期の中国教育との関連性を念頭に置いて、「デューイについての再評価」の原因、再評価の具体的な展開、近年の中国教育におけるデューイ研究の進展について考察した。第一節では、文化大革命終了後の西洋思想の見直しとともにデューイの教育思想の再評価が始まったことを紹介し、第二節では、現代教育改革との関連でデューイやヘルバルトの教育理論の再検討が始まったことを考察した。第三節では、現代中国教育における転換期にあたって子どもの全人的発達を促進する素質教育の理論的基盤のひとつとしてデューイの教育理論が注目されていることを指摘した。第四節では、中国における新たなデューイ研究の成果として、社会思想との関連を重視した孫有中の教育理論研究の特徴を考察した。この間、デューイの著書やデューイに関する研究書が相次いで中国語に翻訳され、中国人学者によるデューイ教育思想に関する研究書も多く出版され、この30年間のデューイ研究は多岐にわたり詳細なものになってきたことを指摘した。

終章は本論文の総括であり、一世紀にわたる中国におけるデューイ教育思想研究の特徴についてのまとめを行った。今後の課題としては、中国教育の特徴である「伝統と西洋化、受容と排除、国家の要請と教育の実践」という対立の中で「デューイ研究」がどのように展開されていくのかについて、歴史の教訓から学ぶことの必要性を提起した。

論文審査の結果の要旨

本論文の研究内容にみられる独創的な貢献は、次の三点である。

第一に、中国におけるデューイの教育理論と実践が及ぼした社会的学問的影響について、約一世紀にわたる変遷を考察することによって、全面的受容期と発展期・反省的批判期・再評価期の三期に分類し、それぞれの時期におけるデューイ研究の特徴を考察したことは新たな研究の視点である。

第二に、文化大革命期における学術的な資料の散逸にもかかわらず、20世紀初期や中期におけるデューイに関する文献資料を検索してそれらを活用することにより、中国におけるデューイ教育思想の受容についての新たな解釈やデューイ批判の具体的内容を解明したことは研究成果として評価できる。

第三に、中国におけるデューイ研究の変遷についての考察に取り組むことにより、中国における西洋思想受容の研究モデルを提示し、社会的政治的变化と教育思想との力動的な関係についての研究を行ったことは新たな研究成果として評価できる。

本論文の内容に対して、審査担当者からは以下のような質問や課題が指摘された。

- 1) プラグマティズムの訳語が実用主義となっているが、その他の訳語との相違点を検討することによって研究者の見解の相違やその背後にある考え方についても検討できるのではないかと。
- 2) 中国におけるデューイ研究の時期区分について、これらの三つの時期は中国の教育学研究における時代区分とも一致しているのか。この区分をした特殊な理由や要因がある場合には、明記した方がよいのではないかと。
- 3) 中国におけるデューイ学派の学者などの考察において、さまざまな教育学者の見解を幅広く紹介しているが、一人ひとりの思想について深く切り込むことも重視した方がよいのではないかと。
- 4) 現代における素質教育重視の流れの中で、デューイとヘルバルトが研究対象として重視されているとあるが、これが国家政策的な影響によるものであればそのことも明記した方がよいのではないかと。
- 5) 中国の研究者が無意識のうちに当然の前提として考えているマルクス主義哲学などの基本的立場や見解を意識化して、それを批判的にとらえる必要があるのではないかと。

申請者は、論文内容に関して指摘されたこれらの課題についても十分認識しており、質疑に対する応答も妥当かつ適切であった。今後も本テーマに関する研究活動を継続することにより、これらの課題を追究することが可能であると、論文審査担当者は判断した。

以上の審議に基づいて、論文審査担当者は全員一致して、本論文が「博士（教育学）」の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。